

## 豊かな「無い」

大学でのキャリアデザインの授業では、毎回テーマを設けてミニプレゼンテーションをしてもらっています。先日のテーマは「最近うれしかったこと、楽しかったこと、ラッキーだったこと」でした。

教室の中を回っていると、学生から声がかります。「先生、楽しいことなんてないですよ」「急に言われたって!」「え〜っ、ラッキーなことなんて、そんなこと〜」「うれしい〜?」

「うれしいことなんて特にない。楽しいことなんて別にない。ラッキーなことなんてそう簡単にあるわけないだろ!」だそうです。大半の学生が「うれしい、楽しい、ラッキー」なことを思い出すのに苦心しているのです。この光景に、私は驚きました。

「今朝電車が事故で止まってしまったの。大急ぎでバス停に行ったら、目の前にバスが止まっています、おまけに座れたのよね。ラッキーだったわぁ」と言うと、「そんなことでいいんですかぁ?」と学生から返事がきます。私は「そうですよ」と断言します。

「うれしい、楽しい、ラッキーの経験がない」のではないのです。感じる事が鈍いのです。おそらく家庭でも、こうした「感情の言葉をつかって表現する」経験をしてこなかったのでしょう。「電車の窓から富士山が見えたから、今日はラッキーな一日だ!」「炊き立てご飯を皆で食べると美味しいね」「電車で席をゆずっただけなのに、めちゃくちゃ感謝されたんだ。うれしくなったよ」などと、家族や身近な人々と会話することをしてこなかったのでしょう。一般的に「こういうことがうれしいことで、こういうことが楽しいことで」ということを学ばずに育ってきたのです。日常のささやかな出来事に、自分の心がどう動いたのか丁寧に見ていくことは、自分の口から言葉にして表現しないと分かりにくいものです。表現をするには相手が必要です。

なんでも持っている友達のアールを喜ばせるために、何を贈ろうか考えたムーチです。「周囲を見ると人は、テレビにはいつも何かが映っているのに、それを見ながら、見たいものはナンニモナイと言う。いつもみんなで何かしているのに、することはナンニモナイと言う。買い物に行ったのに、買いたいものはナンニモナイと言って帰ってくる。そんな様子を見て考えたムーチ。いつもの場所に座って、ただじっとして、何にも探さないでいたら「ナンニモナイ」が見つかった。そこでムーチは、大きな箱に「ナンニモナイ」をつめてアールに贈りました」という絵本を思い出しました。『おくりものはナンニモナイ』（パトリック・マクドネル/谷川俊太郎訳 あすなる書房刊）

「ふたりはただじっとして楽しんだ。ナンニモナイを。そして何もかもを」とあり、最終ページは、二人で並んで眺めている窓の外の景色で終わります。夜空には星がきらめき静かです。家々の明かりが暖かです。

「ナンニモナイ」をときどき味わってみましょう。「ナンニモナイ」豊さを感じるかもしれません。「ナンニモナイ」からこそ味わえる「ささやかな幸せ」への感度を高めていきたいものです。